

講 演

(本紀要所載論文は凡て署名者の責任にして本會の意見を代表するものに非ず)

# 大嘗祭の精神

宮内省前掌典  
國學院大學講師

佐 伯 有 義

一

本會から大嘗會のことに付いて、少し話す様にと申されましたので、甚だ不東でございますが少しく御話を申上げて見たいと存じます。

元來御祭のことは是迄十分の御話が外でもございませず、又書物にも、御祭のことは十分に書いたものがございませぬから従つて一般の人は神道のことにも能く心得て居る人は極めて少うございするが、殊に此御祭のことは一層心得てゐない人が多いのであります。尤も私共從來御祭に奉仕した關係からお

祭に交渉を持つて居る者でも、矢張り餘り能く分つて居ぬのでありますが、社會の耳目を以て任せねばならぬ新聞記者などでもお祭のことなどは餘り分らぬと見えて、能く新聞には、衣冠東帶をして神職が御祭に奉仕したと云ふ様なことを書いてあります。あれなどは事實大變可笑しい話でございますが、文字の上から見ますと、別段さう可笑しくも見えませぬ。衣冠と云ふと、衣は着物でございます、冠は「かむり」です、そして東帶と云ふのは石帶を束ぬるといふ様な意味であります。それでチャント話は分つて居る様であります、事實は中々さうではございませぬ。此衣冠と東帶とは全く別のものでありまして、衣冠とは丁度洋服の方で云ふと、フロックコートに當ります、で上には、黒とか赤とか緑とか黄とか種々の色目の袍を着まして、其の下に單衣を着し、それから指貫袴を穿いて冠をかむつた姿、是が衣冠でございます。東帶といふ方は全く之と別でございまして、洋服では丁度大禮服に當ります。何故に東帶と云ふのかと申しますと、これは衣冠とはずつと違つて下には白無垢を着し、其上へ大口を穿き、それから單衣を着けて、表袴を穿き、更に其上へ袍を着まして、其上へ一種の石の帶を束ねます、それで東帶といふ名稱が出来たのでございます。だから、衣冠東帶と此の二つを一緒にして申しますと、恰もフロックコートの上に大禮服を着るといふのと同じことになります。事實如何にも可笑しいことでございますが、國民生活と御祭とが分れてゐるせい、それ等の事が世の中には能く分つて居りま

せぬ。殊に此大嘗祭などといふ様な御祭になりますと、其淵源が極めて深く、其儀式も大變込入つて居る上に、其規模も極めて廣大でございますから、どうも一般には分りにくいことが非常に多いのであります。で、能く外から大嘗祭のことに付いて是非話をする様にと申されますが實は大嘗祭の組織が随分色々と込入つて居りますし、規模が廣大でありますから、大嘗祭のことを一通り能く分る様に御話申上げるのには大分時間も要ることであるし、又私共にも實は大嘗祭に付てはまだ能く分つて居ぬこともありますので能く研究した上にしたいたいと思つて居る位であります。で果して、皆様の御満足になる様なお話を申上げることが出来るかどうか疑はしいと存じますけれども、存じて居りますだけの事は申上げようと思ひます、どうか其點は豫め御諒恕を願ひたいと存じます。

元來宮中に於ては、恒例臨時の祭が正月の元旦から大晦日に至る迄の間に、約數十度もありますが、其中で恒例の御祭として一番嚴肅な又一番古式の御祭はニヒナマツリ即ち新嘗祭であります。大嘗祭も實は其御祭の趣意に於ては年々行はれる此の新嘗祭と實は少しも變つて居ぬのであります。只御代の初に行はれるのを大嘗祭、年々行はれるのを新嘗祭と申して居りますが、是も極の古い時代になりますと、大嘗と新嘗との區別がありません。御承知の通り大寶令の定めなどに依りますと、どちらも皆大嘗祭即ちオホニヘマツリと、書いてあります。霜月の中卯日、中冬大嘗祭を行ふといふのがそれで、年

々行はれる新嘗祭も矢張オホニマツリであります。それが後に延喜式時代になりますと、大嘗祭と新嘗祭を明かに區別せられる様になります。で其ニヒナメマツリは全く今日の新嘗祭と同じ御趣意のお祭であります。昔は大嘗祭と同じ趣意の神々しいお祭で、殊に其最も大規模のを大嘗祭と申すのであります。昔は御即位の式と大嘗祭とは大抵別々に行はれて居りました。大嘗祭は其の年に出来た新穀を以て神様をお祭りになるのであります。即ち良く熟した稻を採つて、それで白酒黒酒を造り、又陛下に御膳部を献ることをするのでありますから、是はどうしても秋の末か冬の初でないとお祭が出来ぬのであります。で神代以來さういふことに定まつて居ります。尤も御即位式は必ずしもさういふ秋とか冬とかで無くても宜しいので、既に神武天皇様の御即位式は正月元旦であります。だから正月でも二月でも時期に關係はないのであります。昔は大嘗祭と御即位禮とは全く別に離れて居りましたもので、ずっと明治天皇の御即位の時までさうでありました。ところが、京都に於て大嘗祭、即位の禮を行はれるといふことを明治天皇様がお定めになりましたので、そこで即位の禮が自ら大嘗祭と同時期の秋に行はれねばならぬといふことになり、随つて登極令にも其の様に、規定せられました。今日では即位禮及び大嘗祭と兩方同時に行はれます。即位禮は天皇が御位にお即きになつて、初めて紫宸殿に群臣百官を集へ、御即位の式典を御擧げになる大禮でありますから、固より國家の大典であります。歴史の上から申し

ますと、大嘗祭は淵源が深いばかりでなく、祭の色々の關係で、昔から非常に重大なものとなつて居ります。書物の上で見ましても、延喜式五十卷の中の一の卷から十の卷までの十卷が主としてお祭並に神祇式—神様に關係したることになつて居ります。其神祇式の中の一の卷二の卷が年中恒例のお祭で三の卷が臨時に行はれるお祭、四の卷が三枝祭、五の卷が只今是は廢たれましたが、伊勢の齋宮のこと、六の卷が賀茂の齋院のこと、七の卷が祭禮、八の卷が祝詞、九の卷十の卷が神祇官で扱つて居ります神名帳といふことになつて居ります。さういふ風に大抵のお祭は、其十卷の中の一巻とか二巻に幾つも取纏めて書いてございますが、大嘗祭だけは七の卷全卷に亘つて書いてあります。即ち大嘗祭に關する平安朝時代の總ての規定が此延喜式の大嘗祭式にそつくり書き載せてあるのであります。其儀式はどういふ様にして行はれたのかといふと、それは貞觀の儀式、上書きには只儀式とのみしか書いてありませんが、それを見ると分ります。尤も今日現存して居ります貞觀の儀式と云ふものは、實際どうも完備したものではない様でありますが、誰があの様に致しましたのか、兎に角卷數は十卷あります。其中で、大嘗祭に關係した部分だけが三卷あります。朝廷で行はれる總ての恒例臨時の儀式が十卷に書約めてある中で、二の卷三の卷四の卷の三卷は全部大嘗祭のことばかりである所から見ても、大嘗祭といふものが餘程大きいものであることが分ります。即位禮の如きは漸く五の卷の一部として、皇后様の御立ちになる

場合の立后式や、立太子式などの儀式と合せて、一卷に纏められてゐるに過ぎませんが、踐祚大嘗祭となると、特に三卷全部がそれに當てられて居るのであります。斯様に大嘗祭は古代に於きましては非常に重大な、比べものもない程の御儀式であつたのであります。従つて其大嘗祭に關することを總て順序宜く申上げるとなると、僅かの時間では到底困難でありますが、茲には其の大體の要點を昔と今と引較べて申上げた上、此大嘗祭の精神が何處にあるかといふことを續いて申上げて見たいと存じます。で要するに其精神のある所を述べるのが本旨でありますが、併し其精神を述べるに付ては前提として大體どういふ様に大嘗祭の儀式が行はれるか、又大嘗祭と申す御祭はどういふ趣意の御祭で、どうして起つたものであるかといふ様なことを一通申上げて置かぬと話の順序が立ちませぬから、それで先づ大嘗祭の大體のことを申上げ、それから御次第の大體を申上げた後に、どういふ譯で昔から大嘗祭が重んぜられて居るかといふことを申上げて見たいと思ふのであります。

## 五

元來此大嘗祭と申すお祭はどういふ御祭であるかと申しますのに、此お祭には、今年出來た新穀を御飯にお炊きになります。又粥を煮ます。又一方に於てはそれを白酒、黒酒に造りまして之を神様に獻られます。其外に魚類であるとか貝類であるとかいふ物の、味の良い清らかな極精選したのをお供へにな

ります。又果物類をも御供へになります。それ等の神供の中で一番主たるものは新穀を神様にお上げに  
なることで、天皇陛下が先づ神様に之を献られた上、御自身其御直會を其處で御戴きになります。要  
するに今年新穀が出来たに付て、それを神様に献つて其御禮を申上げ、それと同時に又神様の御前に於  
て、御直會と稱して天皇陛下が神様と御對座で御飯を御戴きになり、又白酒黒酒をも御上がりになると  
申すのが此大嘗祭の精神であります。新嘗祭も矢張りそれと大體の趣意に於ては同じことでもあります。

「だいじやうさい」と申しますのは漢字読みでありまして、日本の言葉では「おほにへのまつり」と讀む  
のが正しいやうであります。しかし、昔から日本では漢字を使ふのが多く例になつて居りますから、極  
古いものにも「おほにへのまつり」と假名で書いたものが實はありませぬ。日本紀其他にも大嘗祭と漢  
字で書いて、其の傍に「おほにへ」と云ふ假名を附けた例が多いのでございます。假名のみで書いたの  
には「おほむべ」とあります。これはもう既に音便に訛つた言葉であります。古今集の二十卷に岡山縣  
の吉備のことを詠んだ歌には「御べ」ともあります。正しくは「おほにひなへまつり」でありますが、  
それを「おほべ」「おほむべ」「おんべ」といふ様に訛つて申すのであります。一番正しい言葉として  
は續日本紀に稱徳天皇が天平神護元年に大嘗祭を行はれました時の宣命の中に「大新嘗オホニヘノオホサヒ猶良比」と書  
いてあります。是がどうしても大嘗祭に對しての一番意味の徹底した、完全した、整つた言葉であるま

いかと思ひます。是はどうしてもダイジャウとは讀ませぬ、「おほにへ」若くは「おほにひなへ」と讀まねばなりません。さうして斯ういふ様に書いてありますと、此大嘗祭の「おほむ」の「おほ」といふ意味が能く分ります。元來只今は一般に新嘗祭を行ふといふことが廢れましたが、古代に於ては皇室を初め奉り國民一般が新嘗祭を行ふたもので、御承知の通り萬葉集にも

「爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氏米也母」

といふ歌が出て居ります。これは實際さうあるべきことで、本年出來た所の新穀を以て祖先の御靈を祭るのが新嘗祭である以上、朝廷のみでなく、國民一般にどの家に於ても行ふのが當然でありませう。常陸風土記を初め色々なものにも昔は一般に新嘗祭を行つた證據が出てゐます。そこで一般に行はれる所のもものが單に新嘗祭で、朝廷で行はれる新嘗祭は殊に之を尊んで大新嘗祭と申したのであります。大新嘗祭の大の意味は其處にあります。大嘗祭の大も實は此の大新嘗祭の大と同じことでもあります。御所のことを古くは大内と申しましたが、此の大内の大も、朝廷を尊んで申すのであります。次に「にひなへ」とは今年出來た新穀を以て神様を御饗應申上げるといふことで、「にひなへ」の「なへ」は「あへ」であるといふ説があります。之に付ては色々學者の説もありますが、私は先づそれで宜いかと思ひます。「にひなへ」は即ち「にひあへ」で、新穀を以て「あへ」すること、今年の新穀を以て神様を御饗應



申上げることが、「にひなへ」でありますから、朝廷で行はれる「にひなへ」は「おほにひなへ」であります。其「おほにひなへ」の「なへ」を省いて、又「おほにへまつり」とも申します。それでありますから前に申述べた通り大寶令の規定では、大嘗も新嘗もどちらも「おほにへまつり」となつてゐるので、大寶令には新嘗といふ文字を用ゐず、皆大嘗といふ文字を用ゐるのであります。で、日本書紀とか古事記とかいふ様な書物には「おほにへ」と「おほにひなへ」といふ言葉を區別せずに、兩方等しく使つて居ります。それですから古い日本書紀などに書いてあります方はどちらが年々の新嘗祭であるか、又御代初めの所謂大嘗祭であるか、前後の文章を能く考へて見ませぬと區別が附きませぬ。古事記でも同じ「おほにひなへ」を一方には大嘗祭と書き一方では新嘗と書くといふ風に兩方混じて使つて居ります。斯様に大寶令の頃迄は後世の如くに大嘗祭との區別は確かに附いて居りませなんだ。それが後に、世の中のことが總て禮典儀式の上に於て段々緻密になつて參りますに従つて大嘗祭と新嘗祭の區別が出来たのであります。延喜式にもまだ大嘗祭と新嘗祭との區別がはつきりして居りませぬので、八の卷の祝詞に見えて居る、あの大嘗祭は、年々の新嘗祭のことでありませぬ。今日の大嘗祭ではございませぬ。これで見ますと、延喜式編纂の時にもまださういふ區別を詳しく、喧しくは申さなかつたものを見えます。

そこで既に申上げた通り新嘗祭は今年出来た所の新穀を以て神様を御祭りになり、それと同時に天皇陛下がそれを聞召さるゝといふ御祭であります、其御祭を爲さるゝ所の神様はどういふ神様であるかと申しますと、是は天照大神と天つ神、國つ神、八百萬神を御祭りになるのであると私は思ひます。尤も之については學者の間に色々の説がございまして、天照大神だけを御祭り申上げるといふ説も大分あります。或はさういふ様な説が立つかも知れませぬが、實を申すと昔は總て大らかでありますから、新嘗祭にどういふ神様を御祭り申上げると云ふ様な詮索をする必要もなく、随つて又、それを詳しく書く必要もなかつたのであります。ですから古いものにはそれが判然と書いてないのであります、後に至りまして段々と學者の説が出たのであります。大寶令職員令の神祇伯の職掌を書いた所に矢張り大嘗祭といふ文字が見えて居りまして、其註釋の所に祭神の事が一寸見えて居りますが、それが甚だ曖昧であると言はれて居ります。それは、「朝則諸神之相嘗祭。夕則供<sub>ニ</sub>新穀於至尊<sub>一也</sub>」とあるので御座います。此の至尊とは天子様を申上げるのです。矢野玄道の廣辭典にも其の通りに説いてあります。で朝に諸神を祭るといふのは、今日では日が一定して居りませぬが、昔は十一月の下の卯の日に行ふことに大寶令で明かに規定して居ります。そして上中下と、卯の日が十一月の中に三度ある時には中の卯の日に行はれるのであります。それで朝に諸神を祭るといふのは其の卯の日の夜に、神様を御祭りになること

を申したのであつて、次の夕に新穀を至尊に供するといふのは、昔は斯う十二支を數へて、卯の日が大嘗祭の當日、其次の辰、巳、午、と三箇日が宮中で御宴會の行はれる日でありました。新穀を至尊に供するといふのは即ち此の辰の日、巳の日、午の日に御上に新穀を奉ることであるといふ風に解釋を擧げてありますが、是は少し無理であらうと思ひます。それに付いて色々述べられてゐる學者の説を今年の一月の國學院雜誌に「大嘗祭の沿革及儀式」と題して、一通り詳細に書いて置きました。さう云ふ色々の説も段々と考へて見ねばなりません。誠に恐懼の至ながら、後鳥羽天皇様が御書きになりました建曆二年の御日記の一部を拜見しますと、それには「天照大神、又天神地祇諸神明白(下略)」と載つて居ります。で又、只今は御告文と申しますが、昔は總て御祝詞と申して居ります。それには明かに天照大神、天つ神、國つ神、と斯ういふ様に見えて居ります。それから元の神祇伯——白川家——で集めた「伯家部類」といふ書物にも矢張り新嘗祭の祭神のことが出て居りますが、大嘗祭の祭神としては、皇祖天照大神を主とし奉つて、天つ神、國つ神、八百萬の神、をお祭り遊ばされるのが御尤なことであると存じます。

元來大嘗祭は詰り祈年祭に對する報賽の意味であります。年の初めに年穀の豊かに稔らむことを天照大神を始め奉り御年の神、天つ神、其他八百萬の神に御禱りになつて、さうしてそれが秋になつて豊か

に熟した所で、之を神様に奉られるのでありますから、天照大神ばかりではなく天つ神、國つ神、八百萬の神々を 天皇陛下が御親祭遊ばされるといふことは至極御尤なことと存ぜられます。一體此祈年祭は、延喜式の神名帳に載つて居ります所の三千一百三十二座の神様方に祈年の幣帛を奉られるのでありますから、其御禮の意味でありますならば、新嘗祭の時も矢張り此三千一百三十二座の神様方に幣帛を奉らねばならぬのであります。延喜式の制度に依りますと、新嘗祭には漸く三百餘座の神様だけに新穀を奉られるので、丁度大嘗に奉られる十分の一にも當らぬ様な次第であります。年穀の豊かに稔ることを禱る時には總ての神様に御禱りになつて其御禮には僅かに三百餘座の神様では御禮が足らぬ様に思はれますが、併しながら既に申上げた通り、新嘗祭なり大嘗祭なりは祈年祭に對する御禮で、幣帛こそ奉られぬが、新嘗祭ならば神嘉殿に於て、大嘗祭ならば悠紀主基の御殿に於て、特に天照大神、天つ神、國つ神、八百萬の神々を御招待申されて、さうして 天皇陛下御親ら今年の新穀を以て御饗應になるのであるとしますと、祈年祭の趣意を能く一貫すると存じられます。で私は祭神は天照大神竝に天つ神、國つ神、八百萬の神といふのが至極御尤もであると斯う思つて居ります。で祈年祭が二月に行はれまして、それから只今は十月十七日に行はれます神嘗祭、此の時には伊勢の神宮へ勅使を御遣しになつて伊勢の神宮様に新穀を奉られます。是は天照大神は最も尊い神様でありますから、諸々の神々に先立つ

て第一番に今年の新穀を奉られるのであります。斯様に先づ祈年祭に對する第一の御禮が大神宮に行はれまして、舊曆十一月の上の卯の日に七十一座の神々に相嘗の幣帛を奉られるのであります。此相嘗の幣帛といふ名が廢れまして今日は行はれて居りませぬが、一番尊い神嘗祭に次いで、諸神に新穀を奉り、それから又下の卯の日に大嘗祭が行はれたものであります。此の相嘗の幣帛は特に七十一座の神様方に奉られます。此祭のことはまだ十分研究されて居りませぬが、要するに建國の初めから國家に最も功績のあらせらるゝ尊い神様方を特に七十一座御祭りになつたものであると思ひます。しかし、詳しい説明は今止めて置きます。

扱卯の日が二つの場合には下の卯の日、三つある場合には中の卯の日に於て、新嘗祭ならば神嘉殿、大嘗祭の場合は悠紀、主基の御殿に於て 天皇陛下御親ら天照大神竝に天神地祇の御祭を遊ばし、それと同時に三百餘座の神様に幣帛を供せられるのであります。此の卯の日の御親祭は夜間に行はれますので、卯の日の朝に、豫め神祇官の役人が其三百餘座の神々に幣帛を班ちます。是は地方から禰宜とか神職其他の者を神祇官に呼び集めまして、それ／＼に班つのであります。さうして其晩に新嘗祭が行はれると、斯ういふ順序になつて居ります。

そこで新嘗祭と大嘗祭とは前申したやうに同じ趣意の祭であります。新嘗祭では別段新御殿を御建

てになるといふことがありませぬ。一定の神嘉殿と申します御殿があつて、其神嘉殿で行はれます。是は只今は賢所の直ぐ右脇の所に一構が出来て、それを神嘉殿と申し、其の殿内で御祭があるので御座います。昔は宮中に全く別の一廓が出来て居りまして、其處に神嘉殿が設けられてありました。次に又新嘗祭の場合には特に齋田をトひ定めて、そこで神々をみあへする新穀を作るといふ様なことはありませぬが、大嘗祭の場合には特に悠紀、主基の國郡、只今の言葉で申せば所謂悠紀、主基の縣を定めて、其地方の齋田で新穀を作らしめられます。其外にも總ての點に於て大嘗祭と新嘗祭とは非常に違つて居ります。

それから總て御祭をする時には、是はもう支那でも日本でも同じことでありますが、豫め物忌即ち支那の言葉で云へば、齋戒をして極めて身を清らかにした上、心は勿論目に見るもの耳に聞くもの、總てを清らかにして、さうして御祭を致します。支那には散齋致齋と申すことが御座いますが此散齋を日本では「あらいみ」と申し、致齋を「まいみ」と云ひます。お祭の當日は此の「まいみ」でありまして、御祭のこと以外は一切致しませぬ。散齋といふ方は要するに總ての穢れに觸れない様にするといふことであります。例へば役所に出て居る者ならば、普通の事務は執るが、穢れには觸れぬといふのが此の散齋であります。御祭の事の外は一切何もせぬといふ致齋とは大分に違ひます。今の人は忌だと云つても

色々なことを構はずにやつて居りますが、それでは實は忌にはならぬ、本當の忌といふものは忌以外のことをしてはならぬのであります。只今の皇室の祭祀令も總てさうであります。延喜式などの儀典が矢張りさうであります。大寶令などにも既に其の意味の規定があります、即ち大寶令では祭を大中小と大祀、中祀、小祀といふ様に三つに區別をして居りますが、大祀と申すのは、大嘗祭だけで、外に類似がありません。中祀は新嘗祭とか祈年祭とかいふ様な御祭であります。それから小祀は外の一一般の御祭であります。中祀の場合には散齋致齋を―忌を―合はせて三日間物忌を致しますが、小祀の場合には一日だけであります、ところが大嘗祭には一箇月間で、非常に物忌の期間も長いのであります。小祀の一日間に對して一箇月間でありますから三十倍になつて居ります。此の物忌には必ず祓を伴つたもので、昔物忌を始める時には必ず祓を行ひました、そこで大嘗祭の時には、天皇陛下が先づ十月の下旬に、川の邊に御出ましになつて禊を遊ばされました、之を歌や何かには豊の禊と申して居ります。十一月になると祭の當月ですから、十月下旬に爲さるのであります、之を御禊とも申して居ります。一般の人も矢張り十月の下旬に大祓を致します。さうして十一月即ち祭月の朔日から一ヶ月の物忌に入ります。それで、祭は霜月の下の卯の日に終りまして物忌は終りませぬ。晦の日に大祓を行つて、それで初めて物忌が全く終るのであります。外の御祭ではさういふことはございませぬ。で、此の一箇月の物忌の間は一般

の穢れに觸れることを避けて、忌み淨まはりますから、従つて忌詞といふことがございます。是は大嘗祭に限ることです。尤も伊勢の齋宮、加茂の齋院では矢張り忌詞といふものが決つて居りましたが、國民一般に忌詞を用ゐさせるといふことは是は大嘗祭に限るのであります。殊に人の死ぬことを「直る」人を打つことを「なでる」、病氣のことを「やすみ」といふ風に、言葉まで忌み慎みましてそれを定め、十月の下旬になりますと京都を始め日本全國に布令を出します。さういふ風に昔は大嘗祭を行ふに付きまして、國民一般が祭に従事して居つたと申しても宜しいのであります。尤も昔は今日と餘程制度が違つて居りまして、普通に天皇様が崩御になつて新帝が御位に御即きになる場合の外に、天皇陛下が御齡を召したゝめ皇太子様に御位をお譲りになるといふやうな場合もありましたから、其の場合の事も定めてございました。即ち天子様が其年の七月以前に御退位になりますと、其年の中に大嘗祭が行はれますが、七月以後ですと、肝腎の稻を作る準備がもう出来ませぬから、翌年廻しに遊ばされると斯ういふ風になつて居りました。諒闇の場合は今日と丁度同じであります。ですから大嘗祭を行ひますのには少くとも六、七月から既に準備に掛ります。さうして八月の上旬には、國民一般の祓をする爲に京都の神祇官の使を日本全國の御宮へ遣して天下の祓を致します。それから天神地祇に幣帛を奉り、次に大嘗祭に奉仕する役人、今日ならば大禮使でありますが、昔は檢校行事と申してそれが任命せられます。檢



校には太政官の大納言、中納言がなり、其下の行事には主に太政官の役人がなりまして、總て此大嘗祭の事務を司り、さうしてそれ／＼部署を定めて行ひます。此の檢校、行事が定まると早速豫定の悠紀、主基の國郡の卜定が行はれます。そしてそれが終りますと、只今もございませぬが拔穂使が昔は此の時分からもう地方へ参りまして、稻の熟する迄滞在致し、其國の國司と協力して自分が監督の位置に立つて總ての事を取扱ひます。さうして稻が熟しますと、——昔は拔穂使と云ふ其の役名通り、稻を刈取るといふより本當に其穂を抜取つたのでありますが——特別に注意して一番良い稻穂ばかりを抜取つて何把かに束ね、大嘗祭當日の供御の料にするために、其の生々して居る稻を其處で乾燥いたしまして、清めた上、これを總て穗ながら唐櫃に納めまして、地方官——郡司、又はそれに關係した人々と共にそれを護送して京都に参ります。それを都——京都に持つて参りますと、京都に於きましては、北野に齋場がありまして此處で總て大嘗祭の準備を致しました。今でも京都の北野の右手寄りの方、委しく申せば丁度北野神社と平野神社のありますあの邊一帶を齋場畑と申して、地名に残つて居りますが、あれが昔の北野の齋場跡であります。かう云ふわけで、大嘗祭に關係する人々は十一月になりませぬでも其前から大嘗祭の關係の御用を勤めなければなりませんから、其必要上、特別に早く祓を致します。それを荒見川の祓と申します、後には紙屋川の祓とも申しました。で北野神社と平野神社の間を流れる小川を今でも

紙屋川と申して居ります。貞觀の式には荒見川と出て居りますが、それが即ち紙屋川であります。稻が參りますと、其の以前北野の齋場に一劃を設けて、豫め假小屋の様なものを用意してある。其處へ其稻を入れます、これを稻實殿と申します。稻穂は米即ち稻の實であるからです。大嘗祭の當日に 天皇陛下が御供へになる神饌の御飯はこれで炊きます。又、白酒、黒酒も前以て造りますが、これには少くとも二箇月間は掛ります。で、その爲に、黒酒を造る黒酒殿、白酒を作る白酒殿といふ風に皆それぞれの御殿が建ちます。瓶なども矢張り卜定して新に用ゐます。昔は大きな瓶がありまして、それで二石でも三石でも必要なだけの酒を作つたものです。さういふ風に昔は齋場の中で、總べての準備を致しましたが、今日ではさういふ大規模の事は申しても容易に行はれませぬので、大正の大嘗祭の時には上賀茂社の境内を借りてそこへ酒殿を作り、白酒、黒酒を醸造致しました。それは昔に比べたならば至つて規模の小さいものであります。昔はさういふ風に賀茂で作るとか米は地方で精白して持つて來るとか、いふ様な事は決して無かつたのであります。先づさういふ様に一番大切な米を作るに付きましては、悠紀、主基の齋田に作ります稻の種を特に撰びます、之を撰びの稻とも又撰子チリコの稻とも兩方申します、之を清らかにした上にも尙清らかにし吟味に吟味を加へて、作つた苗の稻穂を抜取つて稻實殿に納めます。白酒黒酒といふ様なものもこれで作られます。それから又大嘗祭に供へます魚類―鯛とか鮑とか鳥賊と

いふ様な物トを奉進する國も紀伊とか淡路、阿波と云ふ風にそれ／＼一定して居りました、しかしそれも矢張り海人が先づ祭をしてから取るので、取つたものは役人が一々其土地へ出張して都へ護送しました。新嘗祭には幣帛はございませぬが、大嘗祭に限つて此幣がございます。今は用ゐて居りませぬが、此大嘗祭に限つて繪服、兎服を供へます。延喜式に、奉る繪服、兎服とございます。これは即ち絶であります、其絶は三河の國で出來た所の赤引の絲で作ります。それを作るのは、稻を作る時に拔穂使を遣るのと同じ様に、神服使と云ふものが三河の國に派遣されます、其時には代々大嘗祭に奉仕する其職の者を連れて參るので、織部の人數は六人から七八人が定例です。それ等の者が三河の國から其絹絲を持つて都に歸りまして、矢張り北野の齋場の中に神服殿といふものが出來て居る、其の神服殿の中で繪服を作るのが昔からの慣例であります。兎服の方は阿波の國で作ります。阿波の忌部—あの大麻彦の方ではない、阿波の忌部神社の方の忌部、あれが神武天皇以來の忌部で、昔から兎服は其忌部の方で作ることになつて居ります。さうして兎服が織れると、京都へ持つて參つて神祇官へ納めます。此の方は一切北野の齋場では扱ひませぬ。又、大嘗祭に御用ゐになる器物なども矢張りそれ／＼造るべき國々が決つて居りまして、其國々で造つて京都へ持つて參ります。さうして十一月の下の卯の日までにそれ／＼準備を致します。それから又一方では大嘗宮——悠紀、主基の御殿を作ります。此大嘗宮は今日も同じ

ことでありますが、只昔は之を大極殿の前の廣場の龍尾壇の上の所に新設しましたが、後に大極殿がなくなりましたので、近頃は紫宸殿を大極殿に擬して其の前庭に悠紀、主基の御殿をしつらへ、其處で大嘗の御祭を行はれました。大嘗宮は一つの柴垣の圍の中に同じく又柴垣の仕切りをして、東の方に悠紀の御殿、西の方に主基の御殿を作ります。其後の方にあるのが廻立殿で、これは 天皇陛下がお湯を召さるゝ御殿です。悠紀の儀を終つて一旦此御殿へお立歸り遊ばされ、又御湯を召されて更に御召換へになつてから主基の御祭を遊ばされるところから廻立殿といふ名稱になつたと申します。廻立といふ名稱は古い名稱があつたか知れませぬが、今日は傳はつて居りませぬ。其外大嘗宮に近い所に「かしはや」が出来ます。即ち御饌所で、昔から色々の文字を書いてありますが、貞觀の儀式には膳屋と書いてあります。是は悠紀と主基と兩方向じ様に使ふのであります。それから又、稻舂屋、貞觀の式には白殿とあります、白を置いて稻を搗く所も出来ます。さういふ様に總ての準備を致しまして、其日の至るを待つのであります。是から其當日の御式に付て申上げようと思ひます。

當日になりまして時刻が參りますと、只今では大嘗祭の役人が各其位置に着いて大嘗宮の警衛に任じます。昔は右衛門とか左衛門とかの所謂六衛府がありましたからそれが衛門を守り、其外それらの役人が各々警衛を致しました。委しいことは略します。

それから大嘗祭の御式として一番先に行はれるのは神座の奉安であります。大嘗祭には前に申した通り、天皇陛下が此大嘗宮へお出でになつて天照大神を初め天神地祇を御招待になつて御饗應になるのですが、固より神様は平生其處に御祭してある譯ではありませぬから之を御招待になるに付きましては、其の御座を用意せねばなりません。之を神座の奉安と申します。御神座の奉安は略古い所の貞觀儀式などで見ますと、天皇陛下が大嘗宮へ御進みになる迄に神座を奉安致しました、恐らくこれが本當であらうと思ひます。天皇陛下が昔大嘗宮へ御出でになつたのは戌の刻ですから丁度夜の八時にあります。八時に御出でになつて亥の刻即ち午後十時に大嘗宮に御進みになる。それ迄に丁度間に合ふ様に神座の舗設を致すのです。神座舗設の事はどういふものか貞觀儀式などにも極簡單にしか書いてありません。畏くも、天皇が御親祭になるといふのは非常に重い事で、是は只今に行はれませぬが、昔は六月十二月に神今食といふ祭がありました。六月は月次祭と伴つて行はれました。月次祭は六月十一日の夜に行はれました。此の六月十二月兩度の十一日の晩の神今食と新嘗祭と此三度しか、昔は天皇の御親祭はありませんでした。此の神今食は先づ大體に於て新嘗祭と同じやうな祭であります、其儀式を説明したものに神座の奉安のことが詳しく書かれてあります。それに依りますと、お祭の時には、今日で云ふと、あの壘の表の様な薄縁——薄縁にも長短色々ありますが——、それを幾重にも重ねて敷いて、

その一番上に薦を敷きます。それが即ち八重疊で、詳しい事は延喜式などに出て居ります。神様を御饗應申上る時には何時でも斯ういふ風に薄縁の様なものや何枚も重ねて御座を設けるのですが、其上には、枕を置いて更に其上へ衾を置きます。それは神様が其處へお出でになつて御休みになる爲です、其外にもう一つ神様の御坐りになる御座を設けます。是等の事は古い儀式の事を書いてあるものを御覽になれば直ぐに分りますが、特にそれに付て一寸申添へて置きたいのは、其神座を奉安するに付て必要な疊の様なものを大嘗宮なり又神嘉殿なりへ、持運ぶのは誰の役であるかといふと、昔は皇族様が其ことに當られました事です。尤も實際に敷物を敷くとか座を設けるとかの事をするのは掃部寮の職掌で御座いましたから、掃部の役人がその事に當りましたらうが、皇族様親王様が親しくそれに附いてお出でになりました、例へば神今食の場合には、神嘉殿の南の御殿の階の所で、それをお受取りになつて掃部頭に御渡しになりました。次に御神座を舗設し其上に衾を置くといふ様なことは一切女官の職掌で、後から女官が出て參つて一切致します。しかしそれは昔の事で、今日では事實女官には、さういふことが出来ませず又知つても居りませぬから、維新以後は總て掌典長がさういふ御用に奉仕する事になつて居ります、同時に又、親王様方が敷物類を御持ちになるといふことも止みまして、後には中納言とか三位とかいふ人がそれをやる様になりました。矢張これは昔の方が意味が徹底してゐると思ひます。神座の奉

安と相並んで大切なものは神饌の調理であります、是はどうするのかと申しますと、先づ神饌其他總てのものを奉じ、前に述べました北野の齋場から行列を立てまして、九條から七條へ出、朱雀門の所に参り京都御所の正門の所へ来て、御門の開かれるのを待つて、中へ入つて参ります。貞觀の儀式に依りますと、悠紀の地方だけの品物を持つて参る人夫の様な者だけが千人以上居ります。悠紀と主基では二千人になるわけで、其外の役人は別でございます。其の行列には行列係、所謂傳令といふものもありますし、其外神祇官の必要なものは皆附いて参りますから、非常に立派な行列でございます。其行列の先頭にはそれぞれ悠紀の國とか主基の國とかの標山を引いて参りますが、其の標山には榊とか桐とかの標木を立てたものです。これが今日の山車の起原であります、後には此標山を祭の本儀を忘れる程に飾り立てるやうになりました。標山が大嘗宮の外に参りますと、その前に神祇官から兪服を持つて出て先廻りして朱雀門の所に待つて居た人々が、其處で行列の間に這入つて一緒に門に入り、さうして繪服と、兪服とだけは外の物よりも先に神祇官が別持つて行つて定められた位置に置いて参ります。外の物は大嘗宮の外まで来て、そこで悠紀、主基と左右に分れて北門へ廻り北門から入ります。其中には神様に御供へするものばかりではなく、辰の日、巳の日の宴會に入用な物までもありますから、それ等の物は大極殿の前に幾つも建つてゐるそれぞれに入れ場所へ置いて、御祭に必要なものだけが列を作つて

北門から入り膳屋に持込まれます。神饌の調理はこれから始まるのです。ちやうど行列が齋場を出るのは卯の日の朝の十時ですからお晝頃迄二時間もかゝれば膳屋へ着きます。神饌の調理の有様は、一寸今日の人には想像出来ませぬが、先づ前に述べました稻實殿に納めてある稻を持つて參つて、白屋に入り、そこで稻を搗きます。今日の様に地方で米にして持つて来るものではありません。その時に、稻春歌がうたはれます、つまり地方から来た造酒童女であるとか酒波であるとかといふ様な司の者が地方の風俗歌を歌ふのであります。これは稻の春き方から説明せぬと分りませぬが、何の事はない、あの兔の餅春の様な仕方ですのであります。あれは熱して來ませぬと早く春かれぬのでありますから春く手を代へずに春き続けます。すると段々熱して來て早くなります。昔は斯ういふ風に造酒童女とか酒波といふ婦人の者が一生懸命に春きましたのですが、今日は形式になつて了つて女官が稻春歌を歌つて致します。さうして稻が白く米に精げられますと、忌火をそこで鑽り出します。外の忌火は前からやつて居りませうが此時にはお米を御飯に炊く爲の火を鑽るのでございます。そこで各々昔は分業でありましたから、何某の國造が火鑽白に火を鑽り出しますと、次に安曇連<sup>アツミ</sup>が其の火を吹き、内膳の司が御飯を炊くと云ふ風に各々其職々で手わけをして調理して、御晝頃から夕方迄の間には總て出來上ります。一番清らかな地方の稻を遙々と都まで持上つて來て、それを精げると直ぐに新しく火を鑽つて炊上げて、出來



上つたものを天皇陛下が神様に御上げになる、これでこそ實に能く徹底して居ます。そこで出来上つた神饌は大嘗宮の中に持つて上りまして、置くべき案に置いて歸ります。

その間一方に於ては、天皇陛下が午前うちに御常御殿から廻立殿へ出御になります。貞観の御式に依りますと、それは巳の刻即ち今の午前十時の事で、それから所謂大忌の御湯を召されます、それから又午後の酉の刻即ち今の午後六時になると、もう一度小忌の湯を召されます。さうして時刻が参りますと、白の御衣と申しまして純白な御衣を召されます、此の時の白の御衣は練つたものでございます。それを御召しになつて御常の御殿から御出ましになり、戌の刻即ち午後八時に廻立殿へお出でになつて、そこで白の御衣を脱がせ給ひ、更に其處で湯を御召しになります。さうして小忌の湯が終ると茲に改めて祭服を御召しになります、是は純白の御装束で、御袴も袍も全く練つてない即ち少しも人の手が掛かつてない極く清らかなものでございます。之を御召しになつてから齋殿即ち大嘗宮へ御進みになります。で大嘗宮へ御進みになる時には、是は只今の登極令でもさういふ風になつて居りますが、廻立殿と大嘗宮との間に布單——普通の布切であります——を敷きまして、其上に葉薦を敷きます。これは前に敷き後に巻くとありまして、天皇陛下が御進みになるだけづゝ前に廣げ、御上が御通りになれば直ぐ巻いてしまつて、決して他の者には踏ませませぬ。即ち現神であらせられる天皇陛下だけしか御踏

みにならないのであります。順々にそれを致しまして大嘗宮へ御着きになつた時には全部巻いてしまひます、昔は此の役を宮内大輔とか宮内大丞とか御側近の立派な役人が致しました。これは何かお履き物をお召しになれば宜しいやうであります、特に御徒跣とありまして此の場合には昔は靴の様なものに御召しになりませぬ、必ず徒跣で御出でになりました。只今の行列にはそれはございませぬ。そして昔は御上の御進みになる前には大臣若くは大納言、中納言といふやうな人が中臣忌部御巫猿女是は女官であります、さういふ人たちが左右に列をして御先導申上げ、なほ主殿寮の官人が燭を取つて御先導申上げました、此場合に限つてお上には菅の御蓋を翳し奉ります。平生ならば他の蓋でも宜しいかと思はれますが、神事は清らかなることを要しますから特に菅蓋を用ゐるのであります。今日は實際上そんな事は出来ませぬが、昔は廊下も何もございませぬでしたから、其處だけは御殿の屋根がなかつた、それで菅蓋をお翳し申上げたのであります。此の菅蓋の役も昔はそれ／＼家柄で定まつて居りまして御車のことを司る車持朝臣が此主基の御蓋を持ち、子部宿禰が笠綱を張る職務を奉じました。今日ではさういふ職がありませんから、さういふ様な職掌は侍従が奉仕いたします。さうして御上が大嘗宮に御着きになりますと、吉野の國栖が古風を奏します。是は矢張り今日の登極令にございます。其所謂國栖の古風が終りますと、今度は悠紀の國司が國から引連れて參りました歌人——是は女であります——が二

十人ばかり、定まつた位置に着いて所謂國風の歌を御聽かせ申すのであります。是も今日の様に樂師がやるよりは其方が人情があつたらうと思ひます。今日はもう是は出來ませぬからございませぬが、それが終りますと各々の語部が出まして古詞を奏します。是はもう中昔此方廢れてしまつたものでありまして、實際どういふことをしたか、想像は出來ても事實は分りませぬ。それ等の語部は多く出雲とか因幡とかから出て居ります。委しい事は貞觀の儀式に出て居りますが、それが二十七ありました。何れも神代以來の御芽出たい事を古い言葉で申上げたのであります。それが終りますと、是は只今ではない事でございますが、吉野の國栖が又古風を奏します。それから悠紀地方の長官が樂師を率ゐて悠紀の國風を奏します。是は今でもある事です。それが濟みますと、昔は隼人司が出まして其家に傳はりました歌を歌つて舞を舞ひましたが、是も今日は傳はつて居りませぬ。それが終りますと參列を致して居ります所の五位以上の人が皆大嘗宮の前の庭へ出まして、跪いて八開手、即ち手を拍つこと四度宛八遍致します。最初に皇太子様がお出でになつて、御一人で八開手をお拍ちになると、其餘の皇族様も皆八開手をお拍ちになり一二三四と之を八遍繰返して皆一緒にやります。それが濟みますといふと次に六位以下の者もさういふ様に致します。それが訖りますと神饌行立と申して、前に内膳の司がそれ／＼調理をして或場所に用意してありました神饌を持つて出て列を作ります。これは今日でもございます。神饌行立と

は神饌を持つて列を作つて立つから申すのであります。是は夜のお儀式ですから一番先には脂燭を持つた者が參ります。是は伴造の役であります。其次に采女（女官の頭）卜部の司（京都の吉田家のやうなもの）が參つて、其次には御手水の道具を持つた者が續きます。此のお道具も矢張り昔と今とは名稱がすつかり違つて居りますが、其兩端が海老の尾の様な形になつてゐる所から海老鱈鹽槽といふ物と、お手洗水の入つて居る多志良加、御楊枝を入れた御楊枝筥、小刀と數筋の藁穂とを入れた御刀子筥、御手水の後御手をお拭ひになる手拭の入つて居る御巾子筥と、これだけが御手水の道具で、それが一番先に參ります。それから神饌になります。神様に神饌を御供へになる神食薦と天子様の御食薦、それから枚手筥と申しまして神饌を御取りになつて御供へになるものだとか、御飯筥とか、それから生魚の入つてゐる鮮物筥、干した魚の入つて居る干物筥、菓物の入つて居る菓子筥といふ風に、それゝ順序に従つて、神饌を捧持して段々進んで參ります。で其の筥は葛筥とも申して蔓草で拵へた極古式のものであります。黒の葛筥とも書いてあります。其筥の中には矢張り柏の葉で出來た葉椀クサハと申す物が入つて居りまして、御飯なり魚なりはそれゝさういふ物に入れますので、普通の物とは全く趣が違ひます。それから白酒、黒酒でありますとか、御初物でありますとか、さういふ神様に御上げになる總ての神饌を持つた者が又後に續いて進みます。これが神饌の行立であります。

神饌行立が終ると 天皇陛下が廻立殿から大嘗宮に御進みになりました、其宮内の玉座に御着きになり、御手水を御使ひになつてから、順次捧げて參る神饌を御手づから一々親供されます。白酒、黒酒も同様奉られます。それが終ると御直會と申して今度は天子様が神前で御饌を聞召されます。これは神様へ御上げになるものとは別に 天皇陛下の召上り物を奉つてあるのですから、それを御上が召上るのであります。尤も大嘗宮内のことには天子様の御所作で、他の者の窺ひ知るべきことではありませぬが、大體の順序としてさうあるべきことであらうと存じます。又大嘗祭については別にさういふことが書いてありませぬが、新嘗祭の場合には攝政だけが御殿の中に入ることが出来ました。勿論是は天皇御幼少の御時に限つてのことでありました。これは天子様の御所作の足らぬ事柄は攝政が補ふといふ意味で入るのですが、攝政を廢めて關白になるともう大嘗宮に入ることが出来ませぬ。しかし大嘗宮の中で途中を取次ぐ者が無くてはなりませぬから陪膳の女官と神饌の女官と二人の女官が入つて其の運び役を致します。後のことは天子様が總て御自分で遊ばすといふ風になつて居ります。さうして悠紀の儀式が終りますと 天皇陛下が悠紀殿から再び廻立殿に御歸りになりましたして少し御休みになつた後、更に御湯を召されて、今度は曉の儀をなされます。それで詰り其れまでの間は廻立殿に 天皇陛下が御出でになることになりすから、従つて古記を見ますと矢張り御上の御用ひになる御衾といふ様なものが廻立殿に

用意されてあります。夜を徹してでありますから御休みになることが出来る様にといふので、昔はさういふ風になつて居りました。さうして曉の御儀が始まるのは辰の日の夜明けになります。何さま手重の御式でありますから、時間が長く掛かるのであります。今日でもさうでありまして、大正四年大正天皇大嘗祭の時に殆ど夜明けになりました。もう宵の儀と曉の儀でそれで夜が明けてしまふのです。それから此の機會に申上げる必要があるのは、此の大嘗祭や新嘗祭の時には、神様に對する御崇敬の御趣旨から警蹕をしない事であります。昔は 天皇陛下行幸の場合には警蹕を唱へました。出づるに警を唱へ入るに蹕を唱ふで、途中で、不敬のないやう、無禮のない様に必ず先を追はせたのであります。所が大嘗祭の如き大切な神事の場合にはそれを御禁じになつて居ります。そしてお祭が濟んで還御の時に初めて唱へるものであります。それで大體の御祭が濟みますと、今度は宴會のお催しがあつて 天皇陛下が新穀を聞召され、皇族様始め群臣百官にも其新穀を以て造つた白酒、黒酒を賜はつて歡を御盡しになります。今日の登極令では之を大嘗祭の大饗第一日の儀と斯う申します。第一日だけは古風ですが、第二日は西洋風の夜宴で、大變趣が違つて居ります。是は今日と昔とは時世が違ふからであります。昔は三箇日になつて居りました。卯の日の式が終りまして辰の日、巳の日、午の日―辰の日、巳の日の兩日は悠紀の國から總てのものを出して全部悠紀の國が負擔し、其次の場合には主基の國が全部負擔しまし

た。―で辰の日には悠紀の帳へ 天皇陛下が御出ましになります。其場所は豊樂殿であります。丁度今日  
日の豊明殿に當ります。昔は大極殿の外に豊樂殿がありました。其豊樂殿の中で御宴會を遊ばされて其  
處へ 天皇陛下が御出ましになつたのであります。で此の悠紀の方の辰の日の御宴會の時には、一番先  
に神祇官の中臣が所謂中臣の壽詞を奏上し、次に忌部が入つて神璽之鏡劍を奉るのが昔からの例で、明  
治の大嘗祭迄はそれが行はれてゐました。此の中臣の壽詞を奏することも、もう今日では中臣氏が居り  
ませぬから―尤も中臣氏が居りませぬでも何か方法をすれば出来ませうが―登極令には其規定がありま  
せぬ。それが濟みますと悠紀主基兩國の献物を捧げます。そこで御宴會が始まりました。天皇陛下へ御  
饌を奉り、それから臣下には饗を賜はる。其時に又悠紀地方の國司が歌人を引連れて行つて悠紀の風俗  
歌を歌ひます。で、それが終りますと今度は主基の帳へ 天皇陛下が御出ましになりました。同じことが  
二度繰返されます。さうして第一日の辰の日が終ると、其次の巳の日にも矢張りそれと同じやうな事  
で、只其外に或は大和舞を奏するとか田舞を奏するとか云ふことが加はつて居るだけであります。第三  
日の午の日には今度は悠紀主基の帳を撤しまして、尋常の御帳台を飾り、そこへ御出ましになります。  
其日には久米舞とか吉備舞とかの舞があります是は今日も變りませぬ。久米舞は今日も傳はつて居りま  
す。舞姫の五節の舞、御歌所の御歌と云ふ様なものは即ち此の午の日に行はれます。ところが今日の登

極令では此の三日が二日に詰められて、後の一日は趣の違つたものになつて居ります。そこで今日に傳はつて居らぬものは省きまして、登極令に規定せられてあるものだけを御話いたしました。

三

さういふ風に同じ大嘗祭と申しましても自づから時勢に連れて古今自ら變化があります。殊に明治維新以後歐米の風が入つて參りまして、形式に於ては大分改まつて居ります。併しその變つてゐるのは未の事でありまして、大嘗祭の眞髓たる趣旨に至つては、是は支那にも西洋にも固より準據すべきものがないのでありますから、是はもう神代ながらの御式が其儘に傳はつて居るのであります。之を儀式の上で見れば、殊に此の貞觀とか延喜とかの時代には朝廷の制度が今日と違ひまして、昔ながらに朝廷に傳はつた所のものをそれ／＼家の者が各其職に就いて奉仕を致しましたのでありますから餘程趣が變つて居りますが、其の大體の精神に至つては、今も昔も變りはないのであります。で大嘗祭の精神が何處にあるかと申しますと、今までに度々繰返して申上げました通りに、今年出來た所の新穀を皇祖天神並に天神地祇に親供されるといふのは、即ち 天皇陛下が皇祖天神に對する報本反始の誠をお盡しになることであると存じます。此の事を明らかにするには此大嘗祭の起原を申上げねばなりません。天孫降臨の時に皇祖天照大神は皇孫尊に天津高御座を任せ給ひ三種の神器を授けて「豊葦原の千五百秋の瑞穂の



國を安國と平けく知ろしめせよ」といふ神勅を御授けになり、尙それと同時に人間が生きて行くには食物が大切であるが、其食物の中で日本人の最も尊重するものは何かといふと稻である、五穀の中で最も大切な稻であるといふ所から、其の降臨に際して天照大神が齋庭の稻穂を御授けになりました。此點は古事記には見えて居りませぬが、日本書紀の一書に見えて居ります。此の齋庭の稻穂を天兒屋根命、太玉命に御授けになつて、葦原中つ國に行つたならば此齋庭の稻穂を皇孫尊に聞召させよ、と云ふ神勅を賜はりました。齋庭の穂とは、齋は即ち齋清まはるで、齋場齋田の意味であります。乃で二柱の神は其稻穂を持つて天から此國に御降りになつたのでありますが、此國にも固よりそれより以前から稻穂はありました。即ち大國主命が既に稻を御作りになつたことが出雲風土記に見えて居ります。其稻穂のことは佐藤信淵の書きました本に大分詳しい説が出て居りますが、天照大神が御授けになつたのは特に優れた良い種でそれを此國に持下させて、所謂神の齋庭にそれを作らしめ給ふたのであります。恐らく此國へ御下りになると同時に其齋庭の稻穂を作る畑を定めて作らしめられたのであらうと思はれます。兎に角さういふ様な意味が日本書紀には見えて居ります。それで新穀が出来ますと、其出来たものを先づ皇祖天照大神に奉られ其次には天神地祇、即ち、外の神々に献り、其次に皇孫の命が聞召された。これが即ち大嘗祭の起源であります。で、皇祖皇孫をひどく御可愛がりになり、又我々國民も之を頂戴してさうして壽

命を繫いで行くべきものであるとして我々國民をも御憐みになつて稻種を御授けになり、そこでそれが熟すると、これは皇祖の御授けになつた稻穂であるといふので、皇祖に對し奉る感謝の念から決して誰がお勧め申上げたといふ譯もなく、皇祖の御恩澤を有難いと思召す御誠心から之を奉られた。それが即ち大嘗祭の根本精神であります。従つて神代の間は勿論、神武天皇の御代にも無論大嘗祭は行はれて居つたと思ひます。此神武天皇の御代に大嘗祭の行はれたといふことは、判然と書いたものはございませぬが、日本紀に神武天皇の四年二月の八日鳥見山中に靈時を設けて皇祖天神を祀られたと申す、これが大嘗祭であらうと思ひます。日本紀の文章には其意味は見ませぬが、古語拾遺の文章を讀んで見ると、明かに其意味が分ります。丁度其大嘗祭に御供へになる所の匏服を御作りになる時特に都から阿波國に人を遣して匏服を作らしめられた、それが後まで残つて貞觀から延喜の時代、更に又其後代までも匏服を作つて大嘗祭に奉るに至つた根元であらうと思ひます。繪服については、さう云ふ傳へはありませぬが矢張り同じであらうと思ひます。どうも此の大嘗宮も後には大極殿の前に設けられるやうになりましたが、極古い時代には別の所に設けられたのであつたらうと思ふのであります。といふのはあの日本紀に磐余の川上に御出になつて、さうして新嘗祭を行はせられたとあります。即ち京都の御所の中でございませぬ。磐余の川上の所に悠紀、主基の御殿を設けて、そこで御供へになつた、それに相違な

いのであります。極古い例はそれでありますから、丁度神武天皇様が鳥見山中上下の地に特に御殿を御建てになつて、天神地祇を祭らせ給ふたのは、即ち所謂悠紀、主基の御殿を御建てになつたものであらうと思ひます。大嘗祭の精神は斯ういふ風に皇孫の尊が皇祖に對させ給ふ報本反始の御孝道を御盡しになると云ふ趣意から出たものですが、就ては此の大嘗祭に一番重いものは何んであるかといふと、我々の日々喰べて居ります米が生活上最も大切なものであると同様に、大嘗祭に於てもその最も主たるものになつて居ります。で此の米を作ります時から先づ悠紀主基の國郡を卜定致して、之を作る場所までも特に選定し、又其稻種も所謂の選の稻と申しまして、特に良種を選び、斯くして皇祖の皇恩を忝く思召されて報本反始の御誠を盡させ給ふお心から少しの手脱りもないやう鄭重の上にも鄭重に致されるのであります。前に申しました様に特に拔穂使を遣して特に注意して清らかに作り上げたものを、當日までに精げた上、直ぐ御飯にして神様に奉られるのも、それを 天皇陛下が悉く御手づから取つて御上げになるといふ事、即ち天子様が御給仕になると云ふ事も、これは一天萬乗の君とは申ししても御先祖に對しては子孫としての恭敬の禮を盡し給ふべきでありますから何處までも皇祖天照大神其他の神々に對して孝敬の誠を御盡しになるのであつて、是は外の國に於ては見られない事であります。我々は支那の此種の禮典について研究を致したいと思ひ乍ら、まだ十分研究も致しませぬが、少しく支那の御祭のことを

書いた禮記であるとか周禮であるとかいふ様なものを見まして、支那の祭と日本の祭とは根本に於て違つた所があると思ひます。日本の國體と他の國との違ひは實に其處にあると思ひます。稻を作ることにどこに付きましては延喜式などにも餘り儀式とかさういふことは書いてありませぬが、稻を作るのにも少しも脱りのない様にといふことになつて居りますから、拔穂使が監督してさういふ點も十分に注意せられたことであらうと思ひます。

今までに申上げました様に延喜式に書いてあります所の次第をずつと讀んで見ますと、決して學者が是は面白いから斯ういふ趣向にしたら宜しからうと云ふ様にして此儀式は決して出來たものではなく、御上は御上で皇祖天神に對する御尊崇の誠を盡さねばならぬといふ大御心に依つて遊ばされるし、自ら職に就いて居る總ての役人はこれ亦、朝廷に對する忠義、朝廷に對する所謂清き赤き直き正しき、一點の曇もなく濁もない心の全部を捧げて、皇祖天照大神其外天神地祇に仕へ奉り、國民一同御上をお助け申上げて誠意を盡すといふ所から此大嘗祭は成立つて居るのではないかと私にはさう思はるゝのであります。ですから此大嘗祭といふものは實に尊い御祭で、是は我國體の萬國に優れて比類のないと同じ様に、大嘗祭といふ此の儀式は全く我國體の精華即ち日本の美德の寄り集まり結晶して出來てゐるものであると思ひます。日本には西洋人の所謂經典がありませぬが、此の御祭こそは日本道德の結晶であつ

て、是程尊いものはないのであります。之に依つて人を懐かせようとか、それに依て誤魔化して人を服せしめようとかいふのではなく、天皇は御先祖に對する大御心即ち御先祖が「安國と平けく知らしめせよ」と皇孫に教へられた其の神勅を守らせ給ふ御心から、國民は又國民で朝廷に仕へ奉る赤誠の心から斯う云ふ立派な御祭が出来たのであると云ふ風に此の大嘗祭のことを能く吟味して參りますと、實に私は大嘗祭といふものは日本國體の表現であると申す外はありません。我々の國家に對する忠誠の念は戰爭に依つてばかり現れるものではなく、大嘗祭に依つても現れて居るのであります。私の申上げ様が下手なことと、又研究が足りませぬために十分な説明を盡されぬのは遺憾であります。能く之を研究いたしまして、之に依つて一面から我國體の貴いことを知り、國民自ら感化して心から正しい道を歩いて行くならば、此點一つだけでも、日本の思想を善導するに足ると思ひます。何卒此精神の十分なる研究を遂げ、之を麗はしく組立て、誰にでも分るやうに説明いたしたいものであると思ひます。(小惠生筆記)



川村清一博士來信

前略乍御手数左の正誤を次回の印刷物中にてなし被下様御願申上候則ち紀要第廿九卷の拙講筆記中一六四頁四行の「幸に日本には此菌が無いゆゑ……」の四十七字は筆記者の聽き誤に付き削除致し度候此菌と申すは涙菌の事にて之は本邦に多く發生し二十年來小生の研究題目の一と相成居る位にして之れが日本に無しなどとありては他日の問題にても相成り候ては困り候間右正誤御依頼申上候、草々不宣

昭和三年五月廿五日